

新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（結論）

—首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011—

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 5): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010–2011

水野 剛也

Takeya MIZUNO

はじめに これまでの要約と本稿のねらい

本論文は、菅直人首相の在任期間中（2010年6月8日～2011年9月2日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌第52巻・第2号（2015年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、第53巻・第1号（2015年11月）に掲載した中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を、第53巻・第2号（2016年3月）に掲載した後編－1では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を、そして第55巻・第1号（2018年1月）に掲載した後編－2では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を質的に分析した。

本号に掲載する結論では、これまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。なお、論文末には付録として菅内閣の略年表を添付してある。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌第52巻・第2号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌第52巻・第2号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く菅首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』 (朝刊)
- ・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』 (夕刊) 本誌第53巻・第1号 (中編) に掲載。
- ・コボちゃん (植田まさし) 『読売新聞』 (朝刊)
- ・ののちゃん (いしいひさいち) 『朝日新聞』 (朝刊) 本誌第53巻・第2号 (後編 -1) に掲載。
- ・地球防衛家のヒトビト (しりあがり寿) 『朝日新聞』 (夕刊) 本誌第55巻・第1号 (後編 -2) に掲載。

4 結論 分析・知見の総括

本項では、先行研究と比較しながらこれまでの分析から得た知見を総括し、今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能、政治的コミュニケーション機能について若干の理論的考察を加える。

まず、本論文の前編で全体像を把握するために量的な側面を分析したところ、特筆すべき知見として以下のような諸点を見いだすことができた。これらの多くは、先行研究が示している知見と根本的な部分において重複するが、菅の在任期間中にとくに顕著に見られた特徴もある。冒頭の「*」は先行研究とほぼ同一の点、「†」は菅の事例に特有な点、あるいは本論文で新たに得られた知見であることを意味する。

* 首相を描く漫画と描かない漫画とのへだたりは、依然としてきわめて大きい。菅を描いているのは、時事的な性格の強い「アサッテ君」(『毎日新聞』朝刊=6本)と「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊=18本)だけである。他方、家庭色が強い「ウチの場合は」(『毎日新聞』夕刊)、「コボちゃん」(『読売新聞』朝刊)、「ののちゃん」(『朝日新聞』朝刊)は1度も描いていない。先行研究が見いだした「時事的4コマ漫画」と「家庭的4コマ漫画」の間にある大きな差異は、民主党から輩出した2人目の首相である菅の任期中も、いささかも縮まっていない。

† 菅の任期中に東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故が発生していることを考えると、どの政党の誰が首相であるか、また国・社会がどのような危機・困難に直面しているかを問わず、首相を描く・描かないという点で各漫画の特徴・傾向は固定的だといえる。ただし、後述するように、大震災後に「アサッテ君」が首相を1度も描いていない点には留意すべきである。

† 頻度を基準に「描かれやすさ」を比較すると、菅は民主党初の首相である鳩山に比べ描かれる頻度が低く、また自民党の4人の前任者(小泉・安倍[第1次、以下略]・福田・麻生)と比べてもいちじるしく高いわけではなく、全体では中間的な位置にある。頻度による「描かれやすさ」を順位づけると、鳩山(1.73%)>麻生(1.38%)>安倍(1.26%)>菅(1.21%)>小泉

(0.83%) > 福田 (0.67%) となる。

† 菅の頻度が中間的な順位となった要因の1つとして、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」の間でこれまでにない大きな差がついた事実を指摘できる。先行研究が「自己主張型」と特徴づけた「地球防衛家のヒトビト」では、菅は鳩山に次いで高い頻度で描かれている。しかし、「世論反映型」の「アサッテ君」では鳩山・麻生・安倍に及ばない。大震災以降、「アサッテ君」はまったく首相を描いておらず、その分、菅の描かれる頻度が押し下げられたといえる。

* 新聞別では『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』の順で頻度が高く（『読売新聞』は0%）、朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。ただし、首相を描く漫画と描かない漫画が完全に分離しているだけに、その解釈には慎重にならざるをえない。

† 内閣支持率の高低には大きく左右されず、菅は在任期間を通じて比較的にまんべんなく描かれており、この特徴は大きな偏りなく均等に描かれた麻生と鳩山、とくに麻生とよく似ている。あえて大まかに分類すれば、どちらかといえば「前半型」の小泉に対し、安倍と福田は明らかに「後半型」、そして麻生・鳩山・菅は起伏の少ない「安定分散型」と特徴づけられる。なかでも麻生と菅は、支持率が比較的の高い前半にやや多く描かれている点で酷似している。

† 先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——の妥当性については、こと菅に限っては判断がつきにくい。任期中に大震災や原発事故というあまりに特異・苛烈な事象が起きていることが、仮説に関する合理的な解釈をさまたげるからである。首相の「描かれやすさ」と内閣支持率や社会的注目度との関係を理論化するには、量的・質的の両面から、今後もさらに研究を積みかさねることが必須である。

† 菅を描いた作品では画像よりも文字のほうが多用されているが、かといって画像の使用が極端に少ないわけではなく、新聞4コマ漫画のシンボル使用についても、より蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。

中編・後編 -1・後編 -2でおこなった質的な分析では各4コマ漫画の首相描写の特徴を明らかにしたが、全体を総括すると、以下に示すような共通点や傾向、あるいは特徴を見いだすことができた。量的な分析と同じく、冒頭の「*」は先行研究とほぼ同一の点、「†」は菅の事例に特有な点、あるいは本論文で新たに得られた知見であることを意味する。

* 首相が登場する作品でも、ほとんどの場合、作中の中心的役割は主要登場人物など無名の一般庶民がなる。1コマの政治風刺漫画とは異なり、首相が主人公として単独で描かれる作品はきわめて少ない。菅の在任期間中は、首相を描いた作品中に主人公一家がまったく登場しない事例はなかった。

† 菅を描く漫画と描かない漫画が完全にわかれた一方で、描いた漫画にしても、東日本大震災を

境に1度も描かなくなった「アサッテ君」と大震災後も継続して描いた「地球防衛家のヒトビト」の間で、大きなへだたりが生じた。

† 大震災後に首相を描いているのは「地球防衛家のヒトビト」だけであるが、「アサッテ君」や家庭色がきわめて強い「コボちゃん」・「ウチの場合は」にも、災害が市民生活に及ぼす影響を題材とする作品は多くあった。ただし、「ののちゃん」だけは、政治家や政治問題ばかりか大震災とその余波（原発事故も含む）さえも完全に「しらんぷり」、でなければ「ヤセガマン」をして扱っていない。

† 前任者の鳩山と同じく、菅を描いた作品には現実としてあった首相の言動を題材とするものが目立つが、とくに「アサッテ君」では、菅は鳩山ほど批判的に描かれているわけではない。総選挙による政権交代で華々しく船出をしたが、支持率を大きく落とした末、わずか8ヵ月後に突然に辞任した鳩山に比べ、菅は国民の期待感や失望の振幅が相対的に小さかった分、描かれる頻度も低く、また政治的に批評・風刺されることも少なかったと考えられる。

† 他の政治家と対比・並列して首相を描く手法は「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」でよく採用されるが、麻生以降、「世論反映型」の「アサッテ君」でも定着しつつある。首相とともに描かれる政治家で、両漫画に共通して登場しているのは小沢一郎元民主党代表である。

* 現実にはありえない架空の状況設定で首相を揶揄する作品が一定数あり、この点で1コマ漫画との類似性が見られる。

* 首相はしばしば新聞やテレビなどマス・メディアの報道対象として描かれ、登場人物はそれを通して首相を見知り・語る。この構図は、菅を描いた24本中、少なくとも6本で見られた。

* 首相に対する風刺・批判は、ほとんどの場合、登場人物を通して語られる。

* 首相を賛美・称賛するような作品は皆無である。

† 新聞4コマ漫画にもジャーナリズムの権力監視・番犬機能をにうものがあり、その特徴は大震災を機にさらに色濃くなっている。

* いくつかの作品は、4コマ漫画の首相描写を十全に理解する上で、当該首相の在任期間中だけでなく、より長い時間枠のなかで連続的な流れを把握する必要があることを示している。

上述の諸点とは別に、家庭的4コマ漫画の首相描写に関して先行研究が提示した仮説については、本論文ではさほど有用な知見を得ることはできなかった。家庭色の強い「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」に首相を描いた作品が1本もないからである。その仮説は、家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」というものである。

ただし、「純家庭的漫画」である「ウチの場合は」と「コボちゃん」には、先行研究が示した仮説をある程度は補強すると考えられる作品が複数あった。菅の辞任をめぐる問題や不安定な政治情勢を

反映していると推察できる作品、さらには、みずからを「どじょう」にたとえて民主党代表選を勝利した野田佳彦を題材とする作品もあった。また、あくまで「純家庭的」な作風の範囲内に収まるものばかりではあるが、明らかに大震災や原発事故を念頭に置いた作品も多数あった。首相描写に関する仮説を援用すれば、首相の辞任やその後継者、そして大震災や原発事故は「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている」がゆえに、家庭色の強い「ウチの場合は」と「コボちゃん」でも取りあげられたと考えられる。

しかしいづれにせよ、家庭的4コマ漫画の首相描写に関する仮説については、今後も継続的な検討が欠かせない。仮説を補強する作品があるといっても、それらが首相を描いているわけではなく、あくまで「間接証拠」にすぎない。また、「ののちゃん」には政治家や政治問題を想起させる作品が一切なく、歴史的な大震災や原発事故さえも「しらんぷり」、でなければ「ヤセガマン」している。家庭漫画の首相描写には依然として説明すべき余地が多い。

次に、先行研究が示した新聞4コマ漫画のタイプわけについても、上述の知見をふまえ若干の考察を加える。先行研究は、首相描写の頻度や方法を基準に、新聞4コマ漫画を以下の4タイプに大別している。

- ・純家庭的4コマ漫画 家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わないタイプで、「ウチの場合は」と「コボちゃん」がこれにあたる。
- ・家庭的4コマ漫画 基本的に上のタイプと同じであるが、ごくまれに政治家や政治問題を扱い、かつ鋭い批評・風刺をすることもあるタイプで、「ののちゃん」がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（世論反映型）政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱うが、作者自身の政治的見解やメッセージをぶつけるというよりは、もっぱら庶民の間で共有されているであろう社会の一般認識や感情を反映するタイプで、「アサッテ君」がこれにあたる。
- ・時事的4コマ漫画（自己主張型）政治家や政治問題を含め時事的なテーマを積極的に扱い、かつ作者自身の政治的見解やメッセージを比較的是っきりと表現するタイプで、「地球防衛家のヒトビト」がこれにあたる。

なお、それぞれのタイプは互いに完全に排他的ではない。

まず、もっとも重要な点として、菅の在任期間中の作品を見る限り、上述のタイプわけを変更・修正する必要性はまったく認められない。「ウチの場合は」と「コボちゃん」は首相を1度も描いていないため、「純家庭的4コマ漫画」のままでよい。「ののちゃん」も政治家や政治問題と無縁で同じ「純家庭的」の要素をもつが、大震災や原発事故にさえ影響を受けていない点をかながみれば、現実社会における出来事（とくに政治的な問題）を意識的に排除していると見るべきである。作者のいし自身「あいかわらず」とのべているように、今後もしばらくは「家庭的4コマ漫画」と独立して

位置づけるのが妥当である。「アサッテ君」では現実の事象にもとづき首相を描く作品が多い一方、政治的な批評・風刺性は薄く、「世論反映型」という分類がふさわしい。また、大震災後まったく首相を描かなくなった一方、こと災害の市民生活への影響については多数の作品で描いている点も「世論反映型」らしい。「地球防衛家のヒトビト」は、作者自身のナレーションを使っている作品があったことに加え、大震災や原発問題を題材として果敢に取りあげ、かつその延長線上で首相を描くことにも躊躇していないことから、「自己主張型」らしさをよりいっそう強めているといえる。

とはいえ、本論文を含め現存する事例研究だけで類型化を確定できるわけではない。とくに家庭漫画の首相描写については未知の部分が依然として多い。時事漫画でも「アサッテ君」は「世論反映型」であるだけに、政治に対する社会全体の認識や評価にあわせてこれまでになかった描き方を見せる可能性は十分にある。今後同じ方法で分析を積みあげることで、新聞4コマ漫画による首相描写の理論化・体系化をよりいっそうすすめる必要がある。さしあたり、菅の後任の野田佳彦、彼ら民主党から政権を奪い返した安倍晋三（第2次）、さらに安倍の後継者に関する事例研究は優先順位の高い課題である。もちろん、先行研究が存在しない小泉以前の首相の描かれ方を分析することによっても、有用な比較材料を得ることができるはずである。いずれにせよ、先行研究が扱っていない首相については、分析結果がまとまり次第、本誌で順次発表していく予定である。

最後に、新聞4コマ漫画とジャーナリズムの権力監視・番犬機能の関係、および政治的コミュニケーションとしての理論的位置づけについて若干の考察を提示して、本論文を締めくくる。

まず、3大全国紙の4コマ漫画全体を俯瞰すれば、首相を描いた作品はわずか1.21%（1,973本中24本）にすぎず、しかも3つの家庭漫画は1度も描いていないという事実は、努めて冷静に受けとめておく必要がある。でないと、首相を描いた一部の漫画・作品ばかりに目を奪われ、実態からかけ離れた過大な評価を下してしまいかねない。

しかし、かといって新聞4コマ漫画がジャーナリズムの権力監視機能と無関係かということ、けっしてそうではない。とくに「地球防衛家のヒトビト」は、東日本大震災以降、市民の立場から権力者の挙動を批判的にとらえる姿勢をいっそう際立たせている。他の漫画にしても、首相を描いてはいないものの、大震災や原発事故の影響を庶民的な生活者の立場から作品化している。新聞4コマ漫画はけっして単純で無色透明な娯楽ではなく、現実の社会や政治問題をある程度反映した新聞報道の一部なのである。

しかも、その視点・観点には、他の報道形態（1コマの政治風刺漫画も含む）には見られぬ独自性がある。その意味では、新聞の他の要素が照射できていない盲点の一部を4コマ漫画が埋めているといえる。

1つとして、子供を含む無名の一般庶民が作品の主役であり、彼らの目や口を借りる形で作者が首相を描いている点は新聞4コマ漫画ならではの特徴である。つまり、政治的な力をもたないごく普通の市民を代表して権力者の言動を監視・批評しているといえ、これこそ原初的なジャーナリズムの番犬機能に通じるといえるかもしれない。

さらに、市井の市民がマス・メディアに報道される首相を見知る・語る、という構図が多用されていることも^{かつもく}刮目に値する。新聞というマス・メディアの内部にありながら、新聞を含むマス・メディアを相対化・客体化し、読者により近い立場で首相を批評・風刺していると考えられるからである。権力者を監視すべきマス・メディア自体が権力化しているという批判がなされる今日、マス・メディアと読者を橋わたしするような4コマ漫画の視座は貴重である。先行研究が指摘しているように、新聞をはじめとするマス・メディアが人々と現実社会をつなぐ「窓」だとすれば、新聞4コマ漫画はマス・メディアそれ自体と人々とをつなぐ「窓のなかにある小さな窓」のような存在だといえる。

上述のような特性をもつ新聞4コマ漫画は、政治的コミュニケーション学概念に依拠すれば、「トリックスター」（いたずら者・道化）になぞらえることもできるかもしれない。日本のマス・メディアと政治の関係を他国のそれと比較検討したスーザン・J・ファー（Susan J. Pharr）によれば、こと政治報道において日本のマス・メディアは「トリックスター」として特徴づけられるという。それは、ある特定の勢力に束縛・支配されることなく、インサイダーとアウトサイダーの立場を行き来しながら神出鬼没、変幻自在に^{かいぎやく}諧謔的、あるいは冷笑的に社会や権力をとらえる存在を意味する。ファーの指摘が日本の主要なジャーナリズム機関の政治報道にどれほどあてはまるかは別として、無名の庶民の立場から政治権力者を揶揄する新聞4コマ漫画には、その政治的コミュニケーション機能において多分に「トリックスター」としての特徴を見いだせるかもしれない。⁶³

付記 本論文をまとめるにあたり、福田朋実氏（東洋大学現代社会研究所）から、多大なるご助力をうけたまわりました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

注

63 Susan J. Pharr, "Media as Trickster in Japan: A Comparative Perspective," in Susan J. Pharr and Ellis S. Krauss, eds., *Media and Politics in Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996), 19-43.

菅直人内閣の略年表

在任期間 2010年6月8日～2011年9月2日 (452日)

2010年 (平成22年)

6月2日 鳩山由紀夫首相が突然に辞任を表明。

6月4日 鳩山内閣総辞職 (ただし、6月8日まで職務執行内閣として存続)。民主党代表選で菅が新代表に選出 (選出時は副総理兼財務大臣)。衆参両院で第94代首相に指名。

6月8日 皇居での親任・認証式後、正式に内閣発足。

6月10日 内閣支持率60% (朝日新聞社の緊急世論調査)。

6月11日 連立を組んでいる国民新党代表の亀井静香が金融・郵政改革担当大臣を辞任。郵政改革法案の成立見送りのため。

6月17日 民主党の参院選マニフェストを発表した記者会見で、「自民党が提案している10%を1つの参考としたい」と2010年度内に消費増税案をまとめる方針を明言。マニフェストには「消費税を含む税制の抜本改革に関する協議を超党派で開始します」としか書かれておらず、党内からも批判。

6月26日 カナダ・ムスコカでG8サミット。

7月11日 参院選で大敗。国会が「ねじれ」状態。

7月20日 伸子夫人が『あなたが総理になって、いったい日本の何が変わるの』(幻冬社新書)を出版。

8月26日 小沢一郎元代表 (前幹事長) が民主党代表選への出馬を表明。

9月7日 沖縄県尖閣諸島沖で中国の漁船と海上保安庁の巡視船が衝突。

9月14日 民主党代表選で小沢一郎を大差で破り再選。

9月17日 改造内閣発足。小沢グループからは閣僚や党幹部を起用せず。

10月1日 臨時国会召集。

10月4日 資金管理団体の土地取引をめぐる事件で、政治資金規正法違反の容疑で小沢を強制的に起訴すべきだと検察審査会が議決。

10月29日 ヴェトナム・ハノイで予定されていた日中首脳会談を中国側が直前に取り消す。

11月5日 尖閣諸島沖での中国漁船衝突事故を撮影したビデオがインターネット上に流出。

11月13日 横浜でのアジア太平洋経済協力会議 (APEC) にあわせ、アメリカのバラク・オバマ大統領、中国の胡錦濤国家主席らと会談。

11月22日 国会軽視発言問題で柳田稔法務大臣を事実上更迭。発言 (11月14日) は次のとおり。「法務大臣はいいですね。2つ覚えておけばいいんですから。『個別の事案についてはお答えを差し控えます』。……あとは『法と証拠に基づいて適切にやっている』」。

11月26日 仙谷由人官房長官らに対する問責決議案が参議院で可決。

12月15日 諫早湾干拓訴訟で上告を断念すると表明。

12月20日 小沢との会談で、衆議院政治倫理審査会に自発的に出席し、資金管理団体の土地取引について説明するよう求めるが拒否される。

2010年中の首相（就任前も含む）の主な発言

・（民主党代表選立候補記者会見で）小沢幹事長は国民の不信を招いたことについて、少なくともしばらくは静かにしていただいたほうが、ご本人にとっても、民主党にとっても、日本の政治にとってもいい。（6月3日）

・（首相就任記者会見で）最小不幸社会をめざす。（6月8日）

・（消費税率引き上げは）自民党が提案している10%を1つの参考としたい。（6月17日）

・（参院選での大敗を受けた記者会見で）消費税に触れたことが、やや唐突な感じをもって国民に伝わった。（7月11日）

・（内閣改造後の記者会見で）「有言実行内閣」を実現したい。（9月17日）

・（臨時国会の所信表明演説で）議論を深める「熟議の国会」にするよう努める。（10月1日）

・（支持者との会合で）いままでいろいろと配慮してきた。そういう意味ではいままで仮免許だったが、いよいよ本免許。……これからは菅直人らしさをだしていきたい。（12月12日）

2011年（平成23年）

1月14日 第2次改造内閣発足。経済財政大臣に起用された元たちあがれ日本共同代表の与謝野馨は社会保障と消費増税の「一体改革」を担当。官房長官には元民主党幹事長の枝野幸男。

1月31日 東京地裁が小沢一郎を強制起訴。

2月22日 小沢の党員資格を停止。

3月6日 在日外国人からの政治献金問題で前原誠司外務大臣が辞任。後任は松本剛明外務副大臣。

3月11日 首相の政治資金管理団体が在日外国人から政治献金を受けていた事実が『朝日新聞』の報道で発覚。同日午前、「外国籍の方とは、まったく承知していなかった」と答弁。

3月11日 東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故発生。

3月17日 仙谷由人を官房副長官に起用。

4月1日 大震災に対する内閣の対応を「評価する」は22%、「評価しない」は60%（朝日新聞社の世論調査）。

4月23～24日 震災等の復興に対する内閣の取り組みに「期待できる」は27%、「期待できない」は55%（朝日新聞社の世論調査）。

5月6日 静岡県浜岡原発を停止するよう中部電力に要請。

5月14日 浜岡原発が停止。首相の要請を「評価する」は62%、「評価しない」は23%（朝日新聞

社の世論調査)。

5月22日 東京で日中韓首脳会談。

5月26日 フランス・ドービルでG8サミット。

6月2日 震災対応で「一定のめど」がついた段階で辞任する意向を表明。自民・公明・たちあがれ日本の3党が提出した内閣不信任決議案が衆議院本会議で否決。

6月3日 辞任時期をめぐり、鳩山由紀夫前首相が「ベテナ師まがいのことを総理がしてはいけない」と批判。

6月20日 復興基本法成立。

6月27日 辞任時期について、第2次補正予算案、再生可能エネルギー特別措置法案、特例公債法案の成立が「めど」になると発言。原発事故収束・再発防止担当大臣に細野豪志首相補佐官、復興担当大臣に松本龍環境大臣を起用。

7月1日 電力使用制限令が発動。

7月5日 松本龍復興担当大臣が放言問題で辞任。後任は平野達男内閣府副大臣。

7月11日 原発再稼働は新たなストレス・テスト(耐性評価)をふまえ判断するとの内閣統一見解。九州電力玄海原発の再稼働を先送り。

7月13日 「原発に依存しない社会を」と発言。

7月15日 「原発に依存しない社会を」発言は「私自身の考え方」であり、内閣の方針ではないと説明。

7月25日 第2次補正予算が成立。

8月26日 民主党代表、および首相の辞任を正式に表明。

8月29日 民主党代表選の決選投票で野田佳彦財務大臣が海江田万里経済産業大臣を破り当選。

8月30日 内閣総辞職(ただし、9月2日まで職務執行内閣として存続)。衆参両院で野田佳彦が第95代首相に指名。

9月2日 皇居での親任・認証式後、野田内閣が正式に発足。

2011年中の首相の主な発言

・(アメリカの格付け会社が日本の長期国債の格下げを発表したことについて記者団に) はじめて聞いた。そういうことには疎いので、あらためていいたい。(1月27日)

・(福島第一原発の爆発を受けた記者会見で) 未曾有の国難をのり越える。命がけで取り組む。(3月12日)

・(東京電力本店に設置した原発事故対策統合本部で) あなたたちしかいないでしょう。撤退などありえない。覚悟を決めて下さい。(3月15日)

・(衆議院本会議での内閣不信任案採決に先立つ民主党代議士会で) 大震災への取り組みで一定のめどがついた段階で、私がやるべき一定の役割がはたせた段階で、若い世代の皆さんに責任を引き継

いでいただきたい。（6月2日）

・（記者会見で）原発に依存しない社会をめざすべきだと考えるにいたった。計画的・段階的に原発依存度を下げ、将来は原発がなくてもやっていける社会を実現していく。（7月13日）

・（記者会見で）本日をもって民主党代表を辞任し、新代表が選出されたのちに総理大臣の職を辞する。きびしい環境のもとでやるべきことはやった。一定の達成感を感じている。（8月26日）

【Abstract】

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 5):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2010-2011

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Naoto Kan during his tenure, from June 8, 2010 to September 2, 2011.

As the last installment of a five-part series, this article sums up the findings of the entire series and presents conclusions.